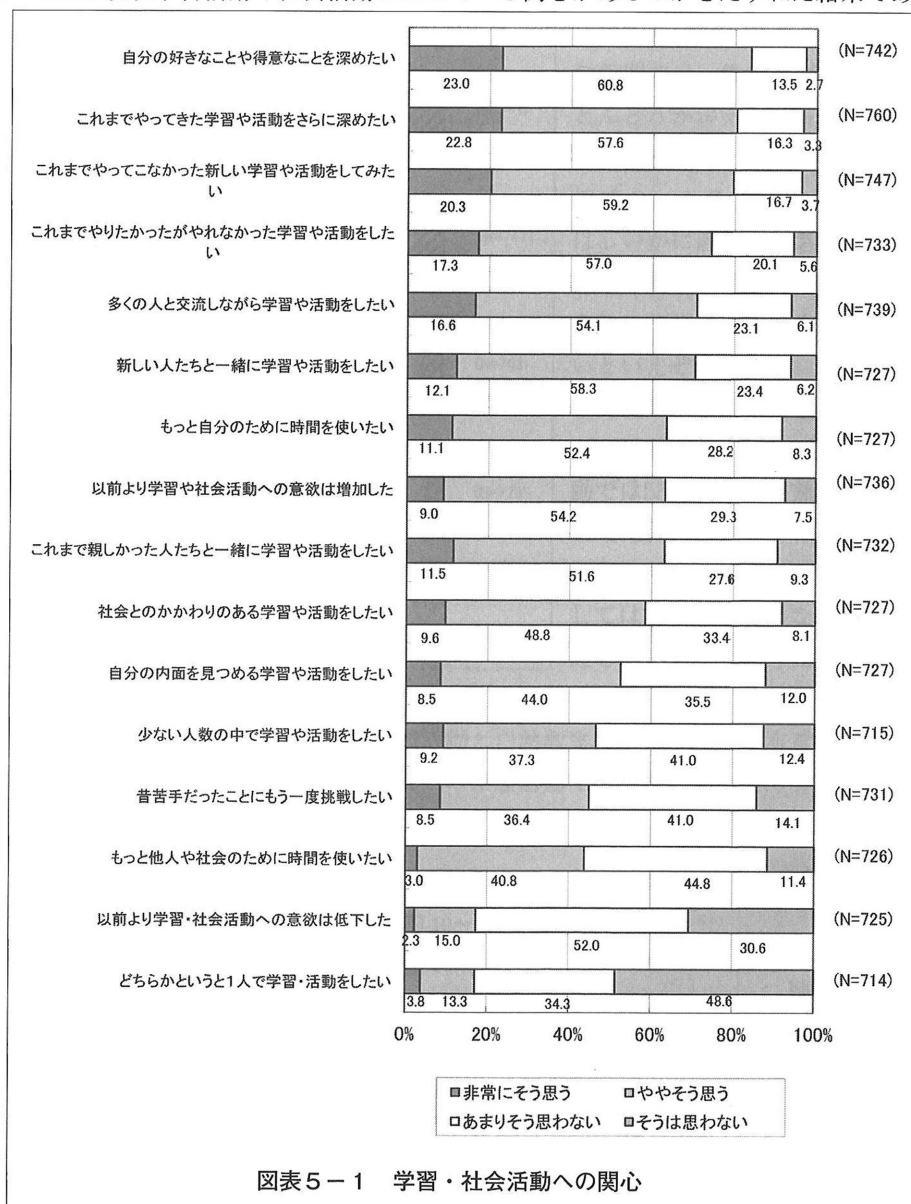


第5章 受講者の学習活動・社会活動などに対する意識

第1節 受講者の学習活動・社会活動への意識の変化

2013年調査では学習ニーズについていくつかの角度からたずねたが、本調査では、①現在の学習活動・社会活動への意識、②70代以降に学びたい学習内容、③60代から70代にかけての学習意識の変化の3点から、受講者の学習への意識をたずねた。これらの設問の背景には、70代以降の学習や社会活動をいかにとらえるかという問題意識がある。

図表5-1は、現在学習活動や社会活動にどのくらい興味があるのかをたずねた結果である（「非



常にそう思う」と「ややそう思う」の合計比率が高いものから順に並べている)。これによると「自分の好きなことや得意なことを深めたい」の84%が最も高率で、「これまでやってきた学習をさらに深めたい」の81%と「これまでやってこなかった新しい学習や活動をしてみたい」の80%がこれに次いでいる。これまでうまくいったものをさらに深めたいというニーズが、非常に高率だということがわかる。逆に「1人で学習・活動をしたい」は17%と大変低率で、「多くの人と交流しながら」が71%であることを考えると、まわりの人とともに学習をしたい人が多いといえる。「1人で学習・活動を」は、「そう思わない」者の比率が最も高かった。「学習意欲が減った」者も17%と低く、「学習意欲が増加した」者が63%と高いことを考えると、高齢者大学校が受講者の学習意欲喚起に一定の効果があるものと考えられる。「他人や社会のため」も44%とそれほど多くなく、やはり自分の好きなことがまず大事だと考えられているようである。

巻末資料をもとに男女別の差をみると、「これまでやりたかったがやれなかった学習や活動をしたい」(男性70%、女性79%)、「新しい人たちと一緒に学習や活動をしたい」(男性64%、女性76%)、「昔苦手だったことにもう一度挑戦したい」(男性41%、女性49%)、「もっと自分のために時間を使いたい」(男性60%、女性69%)で有意に女性のほうが高率であった。これらの項目群から判断するならば、多くの高齢女性が男性よりも、それまでの時期に家事などに時間が割かれ、十分に自分の学習のための時間が取りにくかったのではないかということも考えられる。

同様に巻末資料から年齢別の比較をみたところ、全体的に顕著な有意差はあまりうかがえなかった。そのなかで注目したいのが、「自分の内面を見つめる学習や活動をしたい」で、「そう思う」者が、60代49%、70代前半54%、70代後半以降66%と、年齢にともなう上昇を示していた。「非常にそう思う」でも60代8%、70代前半9%、70代後半以降12%と徐々に比率が上がっている。自身の内面と向きあう学習は60代から70代にかけて活性化する学習だといえよう。また例えば「以前より学習意欲が低下した」などで年齢による比率低下はあまりうかがえなかったが、この施設が地域施設でないだけに、学習意欲が低下した者は参加していない可能性も大きい。

図表5-2は、70代以降に学びたい学習内容である。質問では、70代以前の人には60代までとくらべてどのような学習を行いたい、逆に70代以上の人には、どのような学習を行いたいと思うようになったかを、27個の学習内容領域からあてはまるものすべてに○をつけてもらうというかたちでたずねている。これによると、最も高率であった項目は「歴史」(46%)

図表5-2 70代以降に学んでみたい学習内容(複数回答)

学習内容	比率(回答数)	学習内容	比率(回答数)
歴史	45.5(357)	終活、死に関すること	17.0(133)
健康問題	35.5(278)	政治	15.9(125)
趣味	30.0(235)	園芸・農園	15.6(122)
音楽	25.1(197)	哲学・人間学	15.4(121)
運動・スポーツ	22.4(176)	医療	15.1(118)
情報・インターネット	21.7(170)	書道、習字	14.4(113)
人との交流	21.4(168)	こころの問題	14.0(110)
外国語	20.7(162)	宗教	12.8(100)
古典や文学	19.4(152)	福祉	12.0(94)
美術	19.3(151)	法律	10.3(81)
社会の出来事	19.0(149)	子ども・青少年問題	6.6(52)
経済	18.5(145)	自分史、過去のふり返り	5.5(43)
国際問題	18.0(141)	家族問題	5.2(41)
高齢者問題	17.3(136)	全 体	784

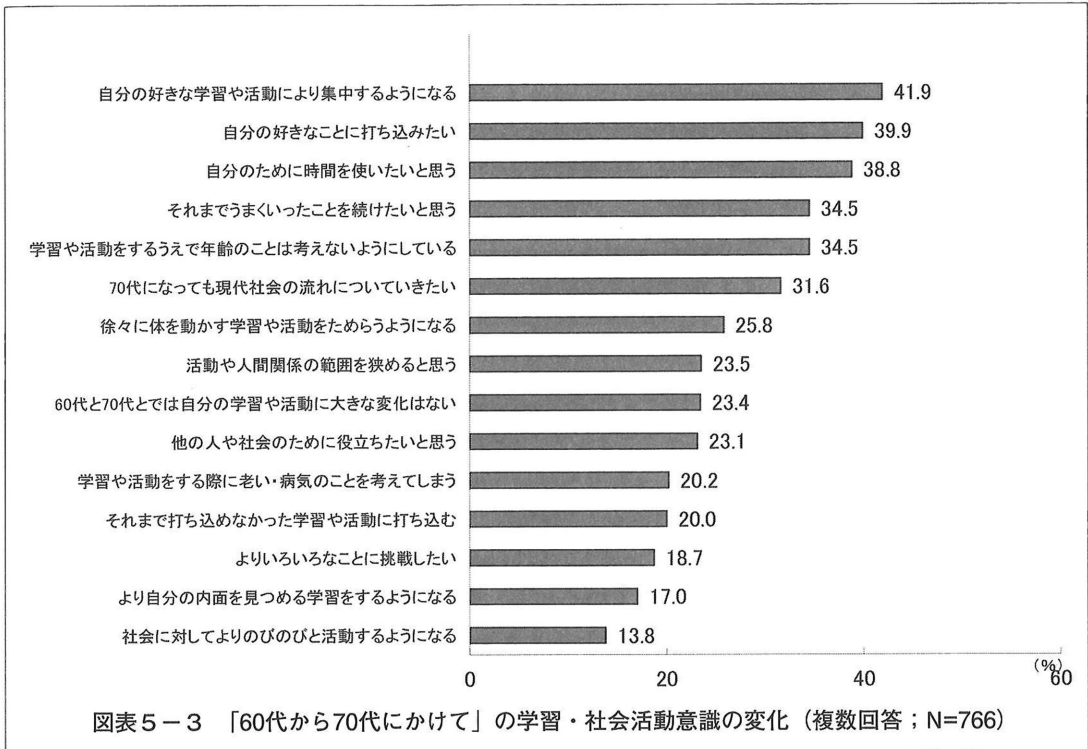
であったが、大阪府高齢者大学校では歴史関連の講座が11個開設されており、その影響が出ているのかもしれない。ただ2013年調査でも最も希望率が高かった項目は、「日本の歴史」(77%)と「地域の歴史や文化」(73%)であった。2008年の西宮市調査でも、88%の者が「地域の歴史や文化」を学びたいと答えていた。したがってとくに地域の歴史への学習ニーズは、高齢者にかかなり根強いものだといえよう。「健康問題」(36%)も高率であったが、これは、70代以降の健康状態の変化への留意が重要となると考えられたからであろう。その後「趣味」(30%)、「音楽」(25%)、「運動・スポーツ」(22%)、「情報・インターネット」(22%)などと続くが、比較的多くの高齢者大学で取り上げられている一般的な学習内容が並んでいるといえる。逆に比較的低率であった項目は、「家族問題」(5%)、「自分史、過去のふり回り」(6%)、「子ども・青少年問題」(7%)などであった。

巻末資料から男女別の結果をみると、男性のほうが有意に高率であった項目は、「歴史」(男性60%、女性32%)、「宗教」(男性17%、女性9%)、「哲学・人間学」(男性18%、女性13%)、「政治」(男性22%、女性10%)、「経済」(男性26%、女性12%)、「国際問題」(男性24%、女性13%)あたりであり、逆に女性のほうが高率であった項目は、「古典や文学」(男性15%、女性24%)、「音楽」(男性20%、女性31%)、「書道、習字」(男性10%、女性18%)、「外国語」(男性16%、女性25%)、「こころの問題」(男性11%、女性18%)、「人との交流」(男性19%、女性25%)あたりであった。男性のほうが社会的・思索的内容に関心がつよく、女性のほうが人間関係的・芸術文化的な内容に関心がつよいといえそうである。同様の傾向は2013年調査や西宮市調査でもうかがえた。

年齢別の差では、「政治」(60代13%、70代前半17%、同後半以上27%)と「人との交流」(60代18%、70代前半26%、同後半以上27%)で年齢が上がるにつれて比率が上昇していることがうかがえた。「歴史」の選択率は、60代で41%であったが70代以上では53%であった。「高齢者問題」「自分史、過去のふり回り」も、70代後半以降で比率が上昇していた。逆に「外国語」(60代25%、70代前半18%、同後半以上13%)、「園芸・農園」(60代18%、70代前半15%、同後半以上9%)は、年齢の上昇とともに比率は低下していた。

学習意識関連の3つめの設問は「60代から70代にかけての学習・社会活動意識の変化」で、図表5-3がこの単純集計の結果である。60代の者にとってはどのように変わると思うかをたずね、70代以上の者にはどのように変わったかをたずねている。これによると、最も高率であった項目は「70代になると、自分の好きな学習により集中するようになる」(42%)で、「70代になると、自分の好きなことに打ち込みたい」(40%)、「70代になると、自分のために時間を使いたいと思う」(39%)がほぼ同率で並んでいる。いずれも「自分の好きなことに特化する」という点で共通しているといえる。「それまでうまくいったことを続けたいと思う」(35%)、「学習や活動をするうえで年齢のことは考えないようにしている」(35%)、「現代社会の流れについていきたい」(32%)といういわゆる継続性に関連する項目も、ほぼ3人に1人が選択していた。それまでの活動スタイルを継続させたいと思うのが70歳前後の課題だという指摘があるが、ここでもあるていどその点が確かめられたかと思える(堀薫夫「継続性の視点からみた高齢期における学習意識の変化に関する調査研究」『大阪教育大学紀要Ⅳ』64(2)、2015、91-100)。

逆に、「70代になると、社会に対してよりのびのびと活動するようになる」(14%)、「より自分の内面を見つめる学習をするようになる」(17%)、「よりいろいろなことに挑戦したい」(19%)、「それまで打ち込めなかった学習や活動に打ち込む」(20%)など、新たなことに挑戦するタイプの活



動はそれほど比率が高くなかった。こうしてみると、「好きなことへのこだわり」と継続性が60代から70代にかけての変化を象徴しているともいえる。ただし全体的にみるならば、14%から42%までの間のばらつきであるため、とくに比率が顕著だった項目はなかったともいえる。このことはいかえるならば、70歳が学習や社会活動の分岐点にならないかもしれないということを示唆しているともいえよう。

巻末資料より学習意識の変化を男女別にみると、「70代になっても、現代社会の流れについていきたい」（男性28%、女性36%）、「学習や活動をするうえで年齢のことは考えないようにしている」（男性29%、女性40%）で女性のほうが有意に高率であったものの、他の項目では有意差はうかがえなかった。むしろ男女差はほとんどなかったともいえよう。「現代社会の流れについていく」に関しては、平均的に男性のほうに職業生活が長かったことが関連しているのかもしれない。

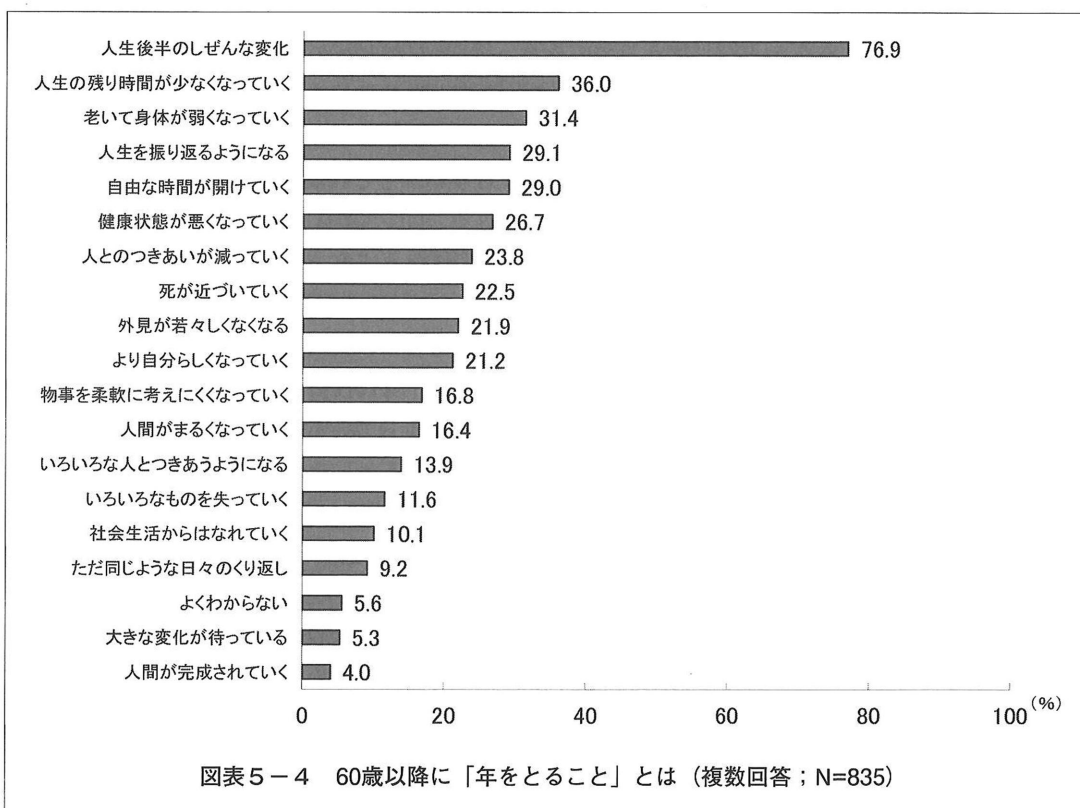
年齢別でも大きな差があまりうかがえなかった。「70代になると、それまで打ち込めなかった学習や活動に打ち込む」（60代16%、70代前半25%、同後半以上28%）では、年齢による比率の有意な上昇がうかがえた。また、「70代になると、自分の好きな学習や活動により集中するようになる」が70代前半で51%（他は39%と40%）と高く、70代になると好きなことに打ち込めるという思いがこの年代に多くうかがえるのが興味深い。しかし回答者が70代後半以降になると、その意識はやや低減するようである。これら以外の項目群では年齢による有意差はうかがえなかった。

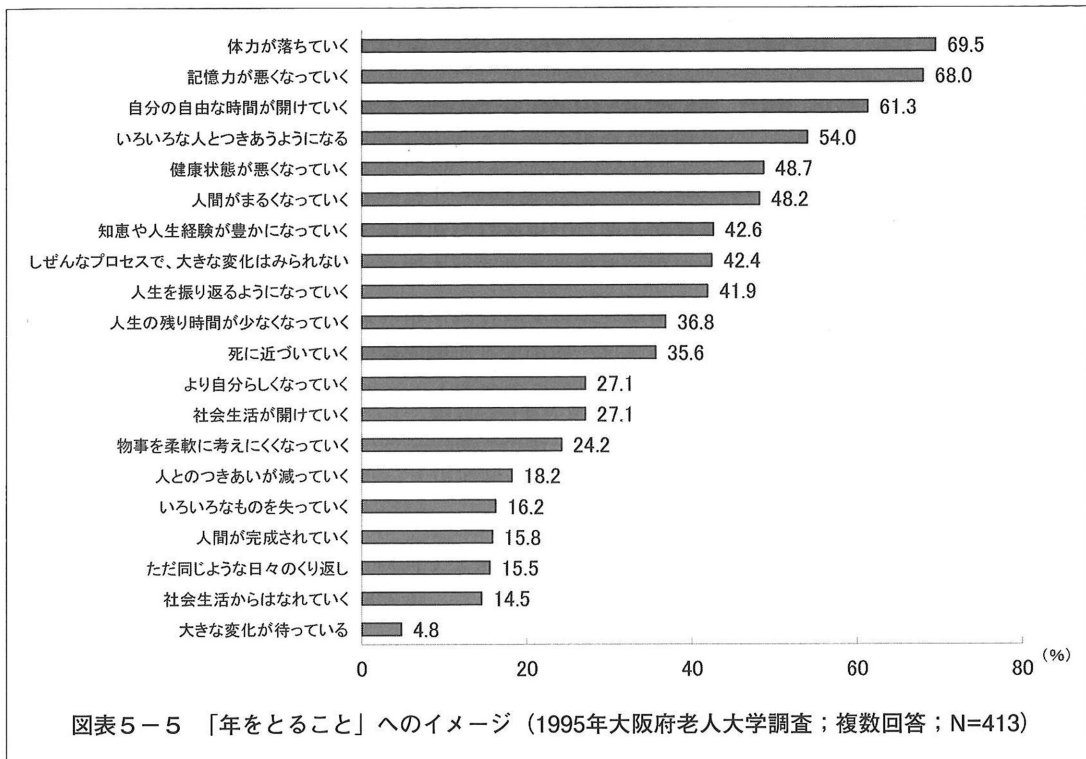
第2節 「年をとること」への意識

学習や社会活動への意識の変化の背後には、年をとることや老い、エイジングに対する意識の変化がある。本調査では「60歳以降に年をとること」に限定して、それに対するいくつかの意見に対して複数回答で意識をたずねた。（なお巻末の質問紙などをみるとわかるように、項目の5は当初は「知恵や人生への理解が深まる」といった項目を予定していたが、質問紙印刷の段階でこの部分が飛び、結果としてこの項目抜きでの質問紙配布となってしまった。そのため項目5は存在しない。）

図表5－4は「60歳以降に年をとること」の回答結果である。これによると、最も高率だった項目は「人生後半のしぜんな変化」で、じつに全体の77%がこれを選択していた。多くの受講者は、高齢期の時期の変化をまずはしぜんなプロセスとして受け容れているといえる。その後、「人生の残り時間が少なくなっていく」（36%）、「老いて身体が弱くなっていく」（31%）、「人生を振り返るようになる」（29%）、「自由な時間が開ける」（29%）、「健康状態が悪くなっていく」（27%）などと続いている。逆に「人間が完成されていく」（4%）、「大きな変化が待っている」（5%）、「よくわからない」（6%）、「ただ同じような日々のくり返し」（9%）などは比率がかなり低かった。ここで留意したいのは、ポジティブな含意の項目もネガティブな含意の項目もともに、高率の部分においても低率の部分においても選択されているという点である。

この設問は、1995年に大阪府老人大学で実施した「老いと死に関する調査」の項目を下地にして





いる。そのときは「あなたにとって『年をとること』はどういうことですか」という質問をしているが、その結果を示したのが図表5-5である（今回は「60歳以降に」と限定しているが、1995年調査では限定していない）。ここで目につくのが「しぜんなプロセスで、大きな変化はみられない」が42%で、今回の「しぜんな変化」の77%と大きな差があるという点である。（この原因は、1995年調査で「大きな変化はみられない」と付記しているためかと思われる。）2008年の西宮市調査では「人生後半のしぜんな変化」は56%の選択率であった。また1995年調査においてもポジティブな項目とネガティブな項目とが、高率・低率それぞれの部分で混在しているのうかがえる。「大きな変化」「社会からはなれる」「人間が完成」「いろいろ失う」などの項目は、いずれも低率であり、20年以上経ても年をとることへの意識はあるていど似ているといえる。

巻末資料から「年をとること」への意識を男女別にみると、「老いて身体が弱くなっていく」（男性37%、女性25%）、「人とのつきあいが減っていく」（男性29%、女性20%）など、どちらかというとネガティブなニュアンスの意識が男性に高率で、逆に「より自分らしくなっていく」（男性18%、女性26%）、「人生を振り返るようになる」（男性27%、女性33%）などややポジティブあるいは中性的なニュアンスの意識は女性のほうが高率であった。

年齢別にみると、「人生の残り時間が少なくなっていく」「老いて身体が弱くなっていく」「健康状態が悪くなっていく」「死に近づいていく」などの「喪失」に関連する意識は、60代に高いことがわかる。しかし全体的には顕著な傾向はうかがいにくかったといえる。